

「湯の街別府から」13回目「地熱を利用したホテル」

湯の街別府市内には、ホテルや旅館など有料の宿泊施設が大小合わせて282か所（2000年3月現在）ある。そのうち最大の収容人数を誇るのが「杉乃井ホテル」（収容人数2914人、2021年3月現在）で、九州だけでなく日本全国でもよく知られた存在だ。



別府市内で最大の収容人数を誇る杉乃井ホテル。

このホテル、別府市内でも老舗に属するホテルで、1944年8月に「杉乃井パレス」という名で、別府八湯の一つ観海寺エリアで開業している。たびたび日本の映画のロケ地としても登場し、別府市民にとっては自慢のホテルであり、別府温泉郷を代表するホテルだと言える。

敷地内には現在、建替え中を含めて宿泊棟が4棟あり、約900人の従業員が毎日、宿泊客のおもてなしをしているが、このホテルの売り物は何と言っても日本最大級の露天風呂「棚湯」があることだ。段々畑のように寝湯が棚田状に広がり、別府湾を一望できるのが大きな魅力で、宿泊客を感激させている。

もう一つ、全国にその名を知らしめているのが、自前の発電所を持っていることだ。それも温泉の余剰蒸気を活用した「地熱発電」で、1981年11月に日本国内のホテルで初めて運用を開始した。専門外なので詳しい発電構造などは分からないが、何でも温泉の蒸気でタービンを回して発電するシステムだそうで、運用当初は出力が3000キロワットあったが、現在は1900キロワットに落ちたものの、ホテル全体で約半分の消費電力を賄っているという。



自前の地熱発電で飾り付けられたイルミネーション

そして、この地熱発電でホテルの名物である発光ダイオード（LED）のイルミネーションが、1年を通して日没から午後11時半までライトアップされている。本館前の道路を挟んだ向かい側には、流れるように色が変わる光のトンネルをはじめ、お城や馬車などのオブジェが配置されていて、インスタ映えはバッチリ。宿泊客だけでなく一般の観光客がわざわざ訪れて来るほどで、クリスマスシーズンになると、大勢の浴衣を着た宿泊客に混ざって、コート姿の観光客も記念撮影する光景はこの風物詩となっている。



流れるように色が変化する光のトンネル

調べたところ、ホテルに限らず地熱を利用した発電施設は、日本全国に46か所（2017年自然エネルギー白書から）ある。このうち17か所が別府市内にあり、すべて温泉の熱源を活用している発電施設で、さすが日本一の湯量を誇る温泉都市だけのことはあるな、と感心させられる。

ただ問題もあるようだ。「価値の高い温泉資源をいかに保護し、後世に引き継ぐのか」という命題で、生活に密着した観光資源として活用されている温泉を、わざわざ発電に使う必要があるのか、という批判。しかも、温泉発電のためにだけ、新たに温泉を掘削する事業者が跡を絶たないことに、別府市では頭を抱えていた。

そこには、温泉の新規掘削の許認可権が都道府県にあることに原因がある。市レベルでは新規掘削を阻止できないからで、苦悩した別府市は発電のためだけの温泉掘削事業者を排除するため、2016年に「温泉資源を守る市条例」を制定、事業者に市長との事前協議などを義務付けた。今では、大分県も温泉資源の保護に乗り出し、2021年には県条例で温泉掘削を禁止する地域の範囲を拡大させている。

温泉を熱源にしたものを含めて、地熱発電の良いところは、昼夜・季節を問わずにクリーンなエネルギーを確保できることや、経済的に再生可能であることなどが挙げられ、国では2030年度までに地熱発電施設を現在の3倍に当たる150万キロワッ

トにする目標を掲げている。すでに全国100か所ほどで調査・発電施設の建設が始まっているそうだが、別府市内では、これ以上の施設増設は難しいかもしれない。同じ地下の温泉水滞でなければ枯れる心配はないのだが、新規掘削で温泉が枯れると危惧するホテル・旅館経営者からの反対は強く、発電施設に限らず市内で新規温泉の掘削はこれ以上望めなそうだ。

文／写真・鈴木源柱